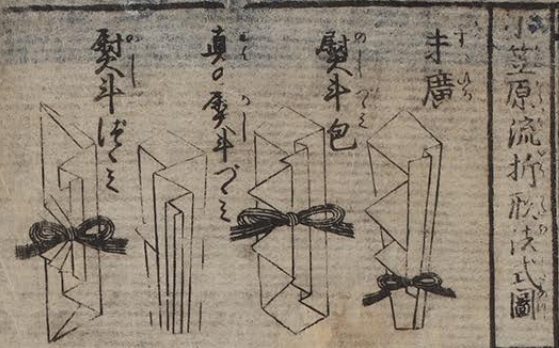
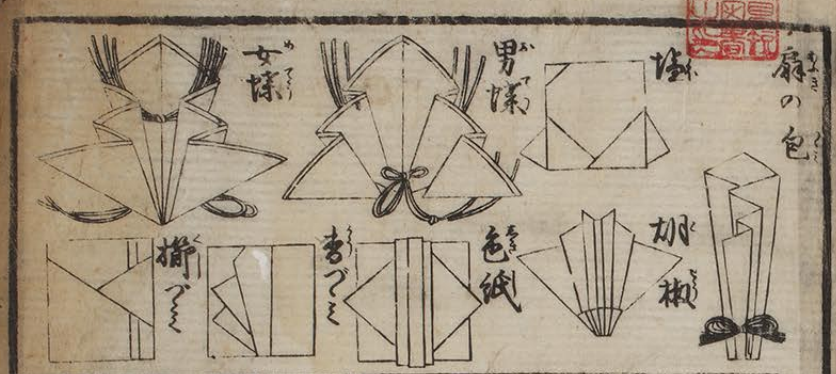
萬世百人一首花文臺

小笠原流折形法式圖





和歌三神之由来

第一住吉大明神八神功皇后三韓をしたがへ給ふ後文徳天皇すみよしに御幸有て神詠あり和歌の浦島の子住吉大明神ましまし

夜やさむさ衣やうすきあやめぐさ
わがいのまくら手枕やたれ

第二玉津島明神人皇二十代の帝允恭天皇の御后衣通姫こゝろ深き武幸の代に不思議にして神詠の歌有

紀及如の浦に勅使
たてまつりたまふ

玉ぼこの道をこの里あしきれん
名をもかりろきれ

第三人麿大明神石見の国語家名しれず人の
妻小横の末の不小児急孤と云ふ
況ぬる小明言へて私ハ父母と住所も白玉
とりつく住家とゆとと言ふ
不のくと此ゆ
高くまいりあまこ
ゆ

婚礼式法

女ハ男の家と知るべし男の家とつかるべし嫁しの家ハ女の家なんいにしへ
男の父母とつるゆゑ〜〜紙タ引くに入てよめの名をはくにべ〜そ紙婚礼を嫁と云て
たゞひか結ぶゆく嫁ハ食事ハ同じ〜されば嫁ハ食事の名をもひもひ
ものさつさ事ありて毎日限と定り男ハ三〜と毎〜紙これと結紙しいろこと

柿本人麿

のびきの
山どろ
とのゐぐら
をれ
ながくしよ紙
むろうを祢ぎ

山部赤人

田子の浦み
うちいで
てみれば
白ぬの
ゆきは
雪はふりける

猿丸大夫

奥山に
もみぢ
ふみ
わけ
なく
鹿ぞ
こえきくときぞ
秋はかなしき

中納言家持

かすがの
はる
雪
白き
ころも
ぬぎ
ぬ
ぬ
ぬ
ぬ

安倍清仲麿

蚕織堂
和田のちう
八十郎
うをてこ
ろた出ぬ
人をはつけよ
あ面のほりゑ
僧正遍昭
そ津風をこの
かぜひら
吹とぢよ
乙女の姿
しばしとどめむ
陽成院
ほくそう孫
業平の
おつる
涙の川
恋をせば
淵と成ぬる
河原左大臣
みちのくに
志のぶ
もぢ摺
誰ゆへに
乱れそめし
我ならなくに

光孝天皇
君がため
春の野に
出て若菜
つむ
我衣手に
雪は降りける
中納言行平
立わかれ
いなばの山の
峰に生る
まつとしきかば
今かへりこん
在原業平朝臣
千早振
神代も
きかず
竜田川
からくれなゐに
水くくるとは
在原敏行朝臣
住の江の
きしによる
なみ
さへや
夢の通ひ
人めよくらん

すぐれてよしや
世と山の
まつもの
あるの
うらうらき
雑炊うさ
伊勢

元良親王
まびぬまバ
今ちさ
抑れ
なふ
する
身とうつて
ものんとそふ

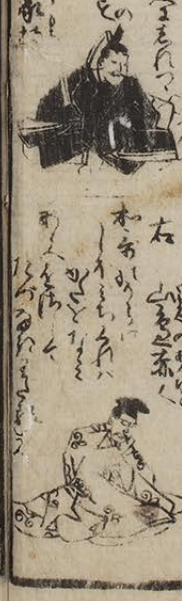
素性法師
今こむと
たのろ
ま月の
あるの
月の
まちおるれ

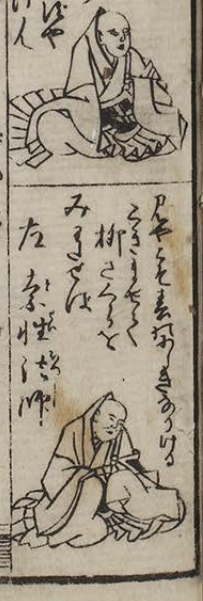
文屋康秀
吹うて秋の
草木乃
ちか
弟し
むべふを
なしやん

三十六歌仙之圖
大江千里
菅家
三條右大臣
貞信公
小倉山
朝忠
左 柿本人麿
右 紀貫之
左 凡河内躬恒

中納言重盛

源宗平朝臣



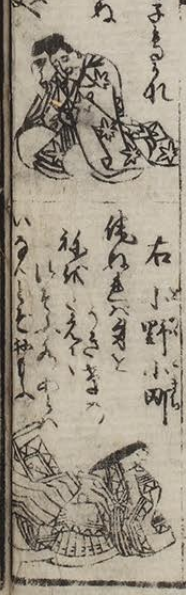


九河内行恒

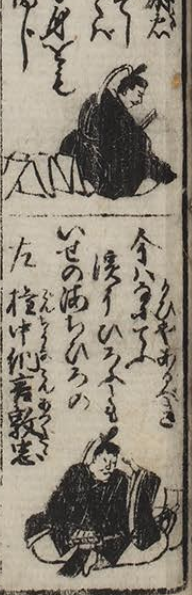
玄生忠岑

坂上是則

春道列樹



紀友則



紀貫之

人をいさ
心も知らず
故郷は
花ぞむかしの
香にほひける

右 菅原高視
世の中ふるさと
すみうかりけり

清原深養父

夏の夜は
宵のまぎれ
月ぞ
雲のいづこに
宿やかたらん

右 壬生忠岑
月の出でしは
いづくの山の
ほとりぞ

文屋朝康

吹からに
秋の草木の
しをれぬれば
なるほど
山かぜを
あらしといふ
らん

右 大中臣頼基
いつれぞ
ぬれぬれ
ぬれぬれ
左 藤原敏行

今一首
ぬれぬれ
左 源公忠朝臣

右 左大臣
一瓶ふりぬれば
ぬれぬれ
左 源宗于朝臣

今一首
ぬれぬれ
左 源宗于朝臣

右近

忘れじの
行末まで
かたらひ
人の命
の
有ばこそ

長義寺
あさちの
をきく
高の
高のまと
何をうて
ゆくら
人のこひき
右 源重之
風をいたみ
岩うつ
波の
おのれくだけて
物かとぞ思ふ
右 菅原道真
風のたよりに
ふれかし
梅の花
右 源頼朝
こひしきは
月
人のこふまで
卒都婆
思ふ
いろて
出
こひ
物やおもふ
人のこふまで
右 源重之
雲の
月
梅の
右 菅原清正
玄宝密見
恋
立ふ
人
右 菅原興風
人
清原元輔
袖と
高
すゑ
つ
山
なく
こさ
は

中納言敦忠

右 清原元輔

右 坂上是則

中納言朝忠

右 菅原孝標女

右 大中臣能宣

謙徳公

右 藤原仲文

右 藤原元真

右 源重之

藤原好忠

惠美法師
源重之
大中臣能宣朝臣
藤原義孝

藤原実方朝臣

藤原道信朝臣

儀同三司母

大納言公任
滝乃音は
絶て
久しくなれど
名こそ
流れて
なほきこえけれ
和泉式部
あらざらん
この世乃
ほかの
思ひ出に
今一度の
逢こそ
紫式部
めぐりあひて
みしやそ
それとも
わかぬ
夜半乃
月かな
大弐三位
有馬山
いなのさ
風ふき
ぬるよ
人を
ま

赤染衛門

やすらハで
ねなましものを
さよふけて
かたふくまでの
月を見しかな

小式部内侍

大江山
いくのの
みちの
とをければ
また
ふみも
見ず
天のはし立

女教 平

[illegible]

生 並 績

[illegible]

伊勢大輔

いにしへの
ならのみやこの
八重桜
けふ
九重に
にほひぬるかな

清少納言

夜をこめて
鳥の
そらねハ
はかるとも
よにあふ
さかの
関ハゆるさじ

藤原宰相道雅
今はたゞおもひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな
相模
うらみわびほさぬ袖だにあるものを恋に朽ちなんなこそをしけれ
和泉式部
あらざらんこの世のほかの思出に今一度の逢ふこともがな
桂中納言定頼
朝ぼらけうぢの川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木

関白殿
春の花の
咲ごとに
ひかるく
そらん
ぬしそ
わすれ
三條殿
あるもの
うゑ
あらば
こひしう
ぬきれ月
紙屋法師
あしの
三笠の
山の
みぢ
まつ
ぬれ川の
みきなりけ
良運法師
ちびしさふ
霜ふる
ぬれば
ぬれ
秋の
ゆふ

大納言經信
ゆつぐとべ
下田の
いなむ
とと
つまこく
ゆつりの
まろやり
秋の夕べぞふく
ぬすみ
袖の
けしや
あぶの
ちぬの
きぬ
まて
きく
猶子関白家紀伊
○衣服ハ意外天皇の御宮に中義より織女一人をうして織
めしのこと伝ハ今ハ絶て用ゐさるハ用ゐ不美と傷しかくまで
も倍摂する衣服と為ること治る御代のありがたさ今も愚なること
なり況都ハ時の時ハ多くハ美人ハ花女仕芸の初ねハ美人ハ
前中納言直房
高砂
おの
ちく
咲よ
やま
きぶ
源俊頼朝臣
うゆ
人を
ちを
山ぶ
きげ
いの

藤原基俊

ちぎりおきし
させもが
露を
いのちにて
あわれとも
いはばいかに
の
秋もいぬめり

法性寺入道前関白太政大臣

わたの
はらこぎ
出てみる
人をも
わかぬ
海の
釣舟

五節

正月七日ハ五の節句にもいてしくさを三月三日ハ桃生の花白又上巳ともいふ五月五日ハ菖蒲の節句にもいてしくさを七月七日ハ星の祭りにもいてしくさを九月九日ハ菊の節句にもいてしくさを

今由来

七月七夕ハ星の祭りにもいてしくさを

九月九日ハ菊の節句にもいてしくさを

崇徳院

瀬をはやみ
岩にせかるる
滝川の
われても
すえに
あはんとぞ思ふ

源兼昌

淡路島
かよふ千鳥の
なく声に
いく夜ねざめ
須磨の
関守

左京亮業平朝臣
梅花
さそふ
風
とも
なれ
さくら
花
よりも
いでし
月の
雲
かくれ
待賢門院堀川
おぐらの
山
もみ
ぢ
葉
の
みだれて
けさは
物
とも
思
はず
後徳大寺左大臣
郭公
なく
なる
山
ほと
ゝぎす
雲
ゐ
に
のぼる
月
そ
ゆ
ふ
ぜ
遍照法師
花
の
ひら
ゝ
命
さへ
ある
あ
と
うた
て
さ
ぬ
ハ
ゆ
ゝ
ま
ま
ら
ん

皇后宮幸後成
世の中よ
もちこと
かれ
ぬひと
山の杉みを
寂うなくなる
薬師法師
なるべくハ
世ごろやまど
志の
れ世を
うせ
今ひしき
後恵法師
秋のすゞろ
物哀
ころい
陽中で
園のひま
さく
法師
なるべくそ
用やい
ものを
れはは
いるも
わのうるる

舞遊法師
むしさめの
雨も
ひぬ
桂の紫
雪さらのわる
妹のなげれ
足柄
孫
目録
書
板
皇子洗方尚
那波江の
あしも
かり孫
一枝の
弟を
つく
庶
てや
まるべき
武子内親王
王の孫よ
ようなるべ
高のぶるこの
ようり
敦冨門院大輔
乃家だわ
と風の
あまれ
袖ぶも
ねまれ
ぬまれ

後京極摂政太政大臣

かくとだに
えやは
伊吹
さしも草
我の
さしもしらじな
燃ゆる思ひを

○うらみわびほさぬ袖だにあるものを恋に朽ちぬる我が名ならまし
○あはれとも言ふべき人の思ほえずいたづらなるこの身なりけり
○あらざらむこの世のほかの思ひでに今一度の逢ふことをだに
○嘆けとて月やは物を思はせぬ月にかこちぬ我が涙かな
○恋すてふ我が名はまだき立ちぬべし人しれずこそ思ひそめしか
○しのぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで

和大僧正義圓
おいあれく
うれしや世の
民ア
わかい
ゑ
ゑ
松ハ
墨ぞあれ社
八道和大政大臣
花さく
あらの
ゑ
ゑ
ト
ゑ
ゑ
ゑ

浪鳥踊覽
順德覽
三夕の和歌
日本六の内玉川和歌曲撰
定家
寂蓮
文政九丙戌年八月再刻
東都書林 永壽堂西村屋與八
馬喰町貳丁目角

58512

x·rite ColorChecker® Color Rendition Chart